

ふるさと交友録

～ 伊藤 公平 ～ 4

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。
この「交友録」では、月1回のペースで
公平さんの「大切なひとひと」を
紹介していただきます。



平野鈴太郎

伊藤公平(いとうこうへい)北見市在住、郷土史研究者。私設図書館「麦の風文庫」と「野草苑があでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさとそぞろ歩る記」を連載。

話を島田さんに戻す。島田さんの母方の出自は、置戸町開祖の二人といわれる平野鈴太郎である。置戸町に最初に居を構えた人は、北見地方に鉄道布設の話が起った時、野付牛村の陳情団などの案内に活躍したアイヌ・エレンコークで、二人目が平野鈴太郎である。

鈴太郎は嘉永六(一八五三)年石川県生まれで、明治八(一八七五)年北海道での大成を夢みて函館行きの和船(日本古来の造船技術によって作られた船に乗ったが、船は風と潮に流されて、目的地函館にはほど遠い釧路に着船した。鈴太郎が北海道のどこで旗揚げしようとしたのかは知る由もないが、函館に戻ることはせず、ここを青雲の志の出発点とした。この時二二歳である。

この天のいたずらは、やがてエトロフ島でよき人にめぐり合わせ、和田村(根室)・野付牛・置戸などを経て、四代後に島田久さんが生まれたという訳である。この天のいたずらがなければ島田

さんはこの世にいなかったし、又、私との出会いもなかったのだから、人の営みの何と壮大で不思議に満ちていることが、などというヨタ話はさておいて、鈴太郎の経営哲学には目を見はるものがある。エトロフでは娘、根室の和田村では父、野付牛では本人がそれぞれ戸主としての本籍を立てている。商売人の信用の証として土着したのかもしれない。置戸では宿屋を開業したが名義人は妻だったようである。

教育にも熱心で、野付牛では公立校開校までの間、自宅に私塾を開き、置戸では起統教授場の開設に多額の寄付をし、のち鈴太郎の葬儀では在校生全員が葬列に参加している。土着すること、教養を身につけること。自らの越し方を通してその大切さを鈴太郎は痛感していたとみえる。明治人の気骨・そんなものを感じる。

島田さんの豪放とみえる一方での慎重さ、磊落とみえる一方での緻密さは、その血を受け継いでのことなのだろう。